

安政3年(1856)

江戸の大風災の惨状

日本最大の台風災害か？

安政2年から3年にかけて天変地異が相次いだ。安政2年10月2日(現行暦1855年11月11日)、「江戸地震」が発生した。下町で特に被害が大きく、地震後30か所から出火、焼失面積は2.2km²に及んだ。江戸町方の被害は、潰れ・焼失1万4千余、死4千余、瓦版が多数発行された。マグニチュード6.9。震源は東京湾の直下地震。

翌安政3年8月25日(同1856年9月23日)、江戸では夕方から雨が降りしきり、戌の刻(午後8時)ごろから南風強まり、雷鳴とどろき、亥の刻(午後10時)ごろには近年まれな大暴風雨となった。夜明けの午前4時ごろによく風雨が衰え、人の歩行もできるようになった。

各地の被害から推定すると、猛烈な台風が伊豆半島付近に上陸し、江戸のすぐ西を通り、関東北部を経て東北地方に進んだものと思われる。暴風と高潮の被害が大きく、いまの東京にとっても最悪の台風コースである。

江戸城中をはじめ、諸大名、武家屋敷、大小の家まで壊れぬものはないほどで、屋根瓦を吹き落とし、戸障子に至るまで吹き飛んだ。築地本願寺は前年の江戸地震では瓦が少し落ちたほどであったがこの暴風で全壊した。浅草三社の前の鐘楼は屋上を吹き飛ばし跡形もなくなった。湯島天神の銅鳥居と神楽堂が倒れ、芝の青松寺、本所の靈山寺の本堂なども倒壊し、御廊内の松の大木も折れた。被害は市中全般にわたり、江戸地震の被害よりかはるかに大きかった。

江戸をはじめ神奈川、千葉でも暴風の被害が大きかったが、同時に東京湾を高潮が襲った。台風による潮位の高まり(気象潮)は、2.5~3.2mに達したという(1959年の伊勢湾台風時は3.4m)。

深川、洲崎、本所や芝高輪から品川海岸辺りは

高潮で海のようになり、人家の被害がおびただしく、木場の木材は流失した。

佃島では西一丁目はことごとく破損し、永代橋の中程から東へ7、8間は風浪に押し流された五百石の大船で壊され、ついに往来止めになってしまった。大川端から大橋への往来へも、大茶船が12、3隻打ち上げられ、浜町辺りは高潮が床上2尺4、5寸(約0.8m)に達した。

浸水の水位は、船橋町役場で床上0.9m、芝増上寺で1m、築地で0.9m、深川本所で1mに達した。至る所で、倒壊した家の柱や梁(はり)などが流れてきて、水中を逃げようとしても歩きにくくけが人も多数でた。高輪海岸には薩州家の軍艦が吹き付けた。

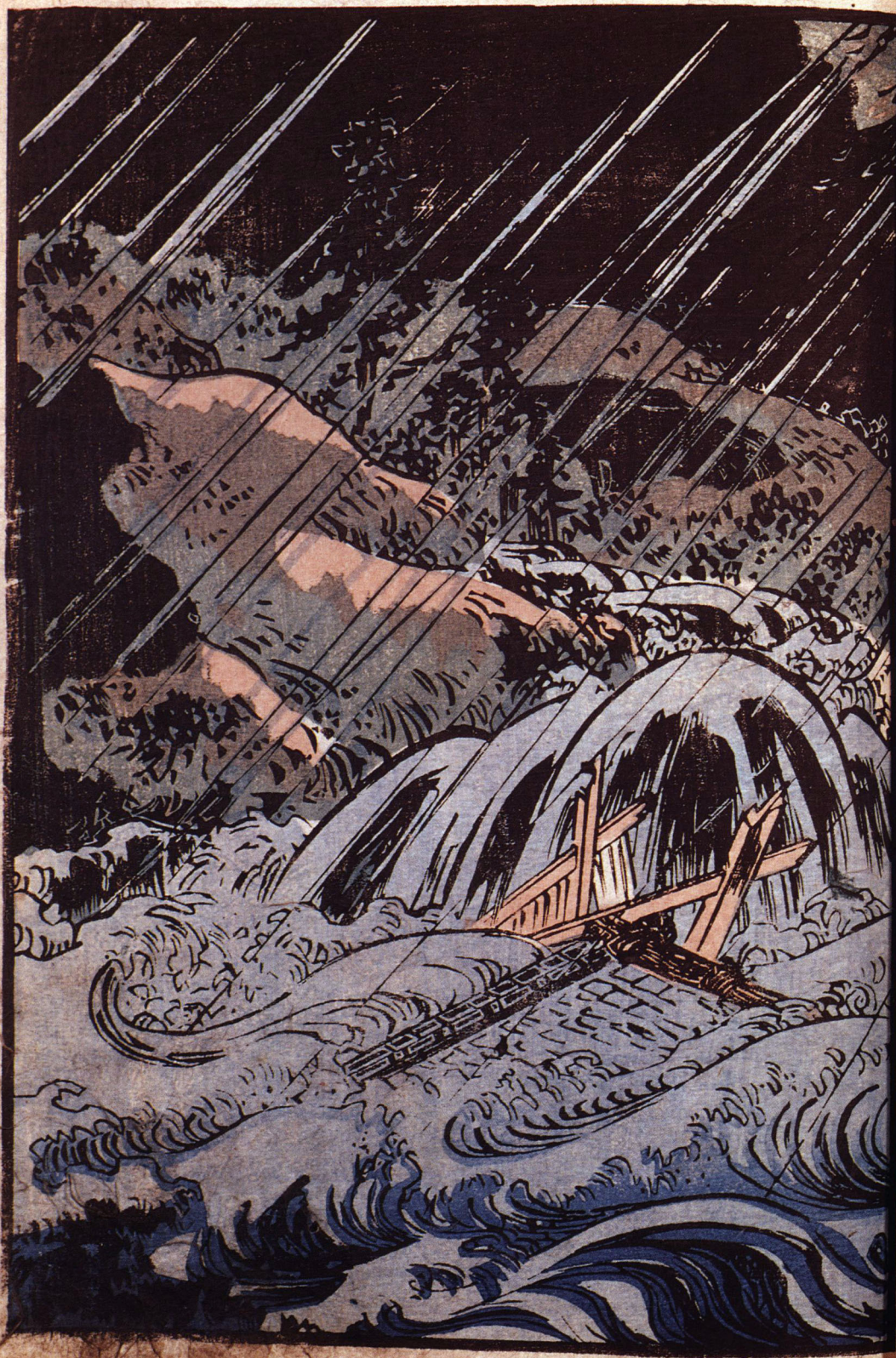
近郊では、大森、鈴ヶ森、川崎から六郷の渡しまで高潮の被害が多かった。砂村、行徳、猫実(浦安)辺りでも高潮によって家が流されたり、溺死したり、また逆浪に誘われて海上で漂流したりする人も多かった。

一方、芝片門前の壊れた家から出火した火災は雨中に延焼し、神明前町辺りまで焼けた。さらに四谷、代々木辺りにも火事があり、大風雨中の火災だったので、人々は逃げ惑い、けが人や死者がおびただしかった。

この大風災の死者は10万余人とあるが(近世史略)、もし正しければ日本台風災害の死者として最大のものであろう。

この絵図は、「安政風聞集」(安政3年12月の出版、金屯道人編)の挿絵の一部である。この災害を機会に、武江年表、震災動揺集などの本格的な災害史が作られるようになった。

宮澤清治/元NHK気象キャスター



安政3年(1856)江戸の大風災の惨状(安政風聞集)／気象庁提供

